

海外で活動する 医療従事者たち

第 10 回

子どもたちの未来を守るために できること

看護職が奮闘するベナンの保健センターより

伊藤由衣 Ito Yui

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 連携協力部 連携推進課 / 看護師・保健師

はじめに

「オ・フォンユエデーア？ アホメトオデ？」

これはベナン共和国(ミナ語)のあいさつで、“こんにちは、元気ですか？ あなたの家族も元気ですか？”を意味します。ベナンではどこで誰と出会っても、このあいさつとともに熱い握手が交わされます。どんなときも、誰に対しても、相手や相手の家族を気遣うこの文化に触れると、人々の温かみを感じずにはられません。私は、青年海外力隊・看護師隊員として、ベナン西部にある町の保健センターに2年間赴任し、母子保健や感染症予防に関する活動を行うなかで、この素敵な国と文化に出逢いました。ベナンを離れて7年が経つ今でも、「相手を思いやるあいさつ文化」は私の基盤になっています。

本稿では、保健センターの目線から、皆さまにベナンの様子をお届けしたいと思います。

ベナン共和国ってどんな国？

ベナンは広大なアフリカ大陸の西部に位置する共和国です。南は大西洋のギニア湾に面し、トーゴ、ブルキナファ

ソ、ニジェール、ナイジェリアと国境を接しており、フランス植民地時代を経て、1960年に独立を果たしました。日本の約1/3程度の面積に1,148万人が暮らす小さな国です¹⁾。主な産業は農業で、綿花、パーム油、トウモロコシが中心です。そして世界一パイナップルがおいしい国だと思います。公用語はフランス語ですが、40以上の民族が暮らしており、日常生活ではそれぞれの民族の言葉が主要言語として使用されます。宗教はキリスト教が多くを占め、イスラム教やブドゥー教なども信仰されています。

ベベと子育て

ベナンでは夫が家族を養い、妻が家事・育児を行うのが典型的です。町を歩けば、必ずとっていいほど、アフリカ布でママの背中におんぶされるベベ(フランス語で赤ちゃんの意味)に出会います。ママの愛情と体温を全身で感じずくすくと成長する姿からは、親と子のふれあいの大切さが伝わってきます。

そんなベナンでは、社会の子育てへの受け入れがとても寛容です。働かないと今日の生計が成り立たず、育児休暇制度が整っていないなどの社会的背景も影響しています



写真1 保健センタースタッフのベベ

働くママの足元に置かれた段ボールでお利口にしています

が、職場や地域住民らが『お互いさま』の精神で子育てに協力し合う環境があります。保健センターのスタッフらは、産後早々に職場復帰し、ベベたちは、ママやスタッフたちにおんぶされたり、足元に置かれた段ボール託児所(写真1)で、みんなの愛情たっぷり受けて育てられます。段ボールって斬新！と驚きましたが、エコな子育てアイデアですよね。もしかすると、現代の日本社会が、ベナン流子育てに学ぶことはたくさんあるのかもしれない。

子どもたちの日常

道端で子どもたちに出会うと笑顔で歌のあいさつをしてくれます。これもベナンに根づく子どものあいさつで、とっても愛らしいです。私は、子どもたちの眩しい笑顔とこの歌に毎日癒されていました。そんな子どもたちは、家事や兄弟の世話もしっかり手伝い、多くの時間を家族と共に過ごします。ベナンの一日は、早朝の掃き掃除に始まり、水道がない家では水汲みも生活に欠かせません(写真2)。子どもたちは積極的に家事を手伝い、学校へ登校します。このように、家族の手伝いを通して、洗濯、火起こし、鶏の捌き方など生活に必要なあらゆる技術を身につけていきます。また、学ぶことにも一生懸命で、街灯の下で、勉学に励む学生の姿がとても印象的でした。



写真2 水汲みを終え、家に帰る子どもたち

頭の上の桶には、満杯の水が入っています

ベナンの保健センター

南北に細長いベナンは、南部は高温多湿の熱帯雨林気候、北部はサバナ気候のため、地域性が流行疾患に影響します。とくに、私が活動していた南部は雨季になるとしばしば道路が冠水し、マラリア患者が急増します。残念ながら、ベナンはマラリアで子どもが命を落としてしまう国の一つでもあります。マラリアをはじめ、コレラ、栄養失調、下痢症、上気道感染症などが流行する一方、高血圧などの非感染性疾患も健康課題です。

ところで、皆さんは保健センターと聞いてどんなところを想像しますか？ ベナンの一般的な保健センターは、産科・診療・予防接種部門で構成される、地域住民にもっとも身近な24時間対応の公的一次医療施設です。産科では産前・産後健診、通常分娩、家族計画に対応し、診療部門では、妊産婦以外の全症例を年齢・症状を問わず対応します。さらに、予防接種部門では乳幼児の予防接種を行います。

また、ほかの低中所得国と同様に、医療資材・保健医療人材に限られるため、保健センターは病院機能のみならず、健康・予防促進機能も果たします。そのため、看護師らは診察・診断・処方・医療処置・予防啓発など、あらゆる業務に対応し、地域住民の健康を支えています。しかし、国民健康保険制度は存在せず、薬代や治療費を支払うことが

できなければ、適切なタイミングで適切な治療を受けられないのも厳しい実情です。

配属先の保健センターでは、地域住民の知識・資金不足により受療行動が遅れるケースも多く、基礎疾患(慢性栄養失調など)も重なり、命を落とす子どももいました。すべての人が良質な一次医療にアクセスできることは大変重要ですが、「受診の遅れ」にある背景を知るほど、地域住民の予防意識の向上なしには地域の健康は高められないことを痛感しました。

ワクチンで防げる病気を防ぐ

予防のなかでも大きな役割を果たしているワクチンは、子どもたちの命を守るもつとも費用対効果の高い介入策として知られています²⁾³⁾。ベナンの保健センターでも、5歳児未満児死亡率^{註1)}の減少に向け、予防接種拡大計画として、すべての乳幼児に無償でワクチンを提供しています(写真3)。私が活動していた2013年当初、生後直後から9カ月にかけて、BCG、ポリオ、5種混合(ジフテリア、破傷風、百日咳、B型肝炎、Hib)、13価肺炎球菌、麻疹、黄熱病の全ワクチンを5回に分けて接種することが推奨されていました。確実なワクチン接種で子どもたちの未来を守るには、保健医療従事者の予防接種活動(ワクチン管理、標準実施手順、記録、啓発)とママの予防意識が鍵となります。

命のパスポート

適切な予防接種には正しい予防接種記録も欠かせません。ベナンでは、妊娠経過を記載する手帳と、生後直後からの情報を記載する2つの手帳があり、両方を合わせて日本の母子健康手帳の役割を果たします。後者には、出生時情報、予防接種記録、成長曲線グラフなどが含まれ、子どもの情報はこの手帳に凝縮されています。そのため、ママたちの間では、わが子の健康情報と成長を記す「命のパスポート」のように認識され、大切に保持されています。予防接種日には、背中にわが子をおんぶしたママたちが、命のパスポートを大切に握りしめ保健センターにやってきます。

しかしながら、ベナンの記録システムはすべて手書きの



写真3 保健センターでの予防接種の様子
ママ(左)、保健センターのスタッフ(右)

ため、複写作業が多く、命のパスポートへの予防接種記録の書き忘れ、書き間違えも頻発します。また、西アフリカ諸国では、産後に国内外に引越するケースも多く、引越先保健センターで予防接種を継続するには、命のパスポートの情報だけが頼りです。このように正しい接種記録があれば、隣町・隣国の保健センターでも適切なフォローアップを受けることができます。

集団に、一人ひとりに、向き合い伝えること

全5回の予防接種が完全接種とされていますが、実際には、適切な時期での接種忘れや、ドロップアウトしてしまう子どももたくさんいます。

命のパスポートには、次回の予防接種予約日が記載されますが、文字が読めないママは次回予約日がわからず、予約日に保健センターに来ないママも多かったです。そこで、完全接種率の向上に向けて、次回予定日について、ママ一人ひとりへの口頭説明を徹底する活動を行いました。予防接種部門の担当スタッフらにより、「5回目の定期市の日に予防接種に来てください」など、ママの生活のイベントに合わせた伝え方がなされました。活動を始めた当初、ママの理解度に合わせて丁寧に説明するという骨折り作業にどれだけ意味があるのか? とスタッフらは面倒さを感じていたようです。しかし、スタッフたちの丁寧な声かけが

註：ベナンの5歳未満児死亡率(出生1,000人対)⁴⁾

2013年 104.4人

2018年 93人

確実に届き、予定日に来院するママが徐々に増えていきました。それからというもの、予防接種予約日時の口頭伝達がスタッフの間で習慣化されていき、改めて相手に寄り添い言葉で伝えることの大切さを実感しました。

ある日、わが子の予防接種部位を、サンダルで叩くママがいました。私と同僚はその衝撃的な行為に目を疑い、ママに叩いた理由を尋ねると、「予防接種部位を履物で叩くと健康によいと聞いた」という答えが返ってきました。ママは純粋にわが子の健康にとってよいことだと信じて、叩いていたのです。このほかにも、言い伝えや宗教などにより、予防接種を否定的にとらえる住民もいるそうです。どの国のママの行動にも必ず理由があり、その理由は、私たちの想像を絶するかもしれません。しかし、文化・社会的背景を十分に配慮し、相手の健康や予防行動の裏にある理由を理解することが、人々の健康や行動変容に介入するうえでとても重要です。

また、ベナンでは健康に関する正しい情報を入手する機会が限られており、何のためにわが子が予防接種をしているのかわからないママもたくさんいます。そのため、保健センターに来院したママたちに対して、紙芝居などを用いた啓発活動(予防接種の理由と必要性、予防接種時期、母乳栄養、離乳食、マラリアなど)の導入により、予防接種の完全接種の推進と、健康や予防に関する情報について、定期的に発信することにしました。啓発活動は、一人でも多くの住民に正しく情報が伝わるよう、現地語で行います(写真4)。

啓発活動が継続されるようになると、ママから予防接種や母乳育児に関する相談などが寄せられるようになりました。マンパワーが限られるベナンの臨床現場において、情報発信の継続は容易ではありません。また、たとえ私たちのメッセージが届いても、メッセージを受け取った当事者が行動に移す意識や環境が揃って、はじめて健康に一步近づけることができます。啓発活動の成果を実感するには時間も努力も要しますが、集団や個人を対象に、「健康のためのわかりやすいメッセージ」を伝えることは、地域住民の予防意識の向上には欠かせません。また、ママたちとのコミュニケーションは地域住民の健康ニーズの発見にもつながります。

おわりに

ベナンでの経験を通して、“相手や相手国の目線で考え



写真4 啓発活動の様子

予防接種に来たママに母乳栄養について啓発しているところ

る”“問題を総合的にアセスメントし、個性を踏まえた対応をする”という看護の基本は、いかなる環境においても重要であることに改めて気づかされました。また、人材を含むあらゆるリソースが限られる状況において、公衆衛生的観点から、人々の予防意識に介入することの重要性和、その難しさに直面した2年間でした。ベナンに住むすべての人々が、健康に関する正しい情報に自由にアクセスできる環境が整い、より健康に過ごせる未来を願ってやみません。これからも、世界の笑顔のために、どんな環境においてもその土地で生活を営む人々の生活と健康に寄り添える看護師でありたいと思います。最後に、私のベナンでの生活と活動を支えてくれたすべての人々に、心より感謝の意を表します。

【文献】

- 1) 外務省：ベナン基礎データ。
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/benin/data.html> (2019年1月14日最終アクセス)
- 2) The World Bank : World Development Report 1993 : Investing in Health. 16th ed, Oxford University Press, Oxford, 1993.
- 3) Jones G, Steketee RW, Black RE : How many deaths can we prevent this year? Lancet 362(9377) : 65-71, 2003.
- 4) World Health Organization : Global Health Observatory data repository. Probability of dying per 1000 live births Data by country.
<http://apps.who.int/gho/data/> (2019年1月4日最終アクセス)